妙道会

片野博義
（現代宗教研究所研究員）

昭和六十二年四月一日午後一時より大阪市天王寺区松ヶ鼻町の妙道会本部において、本部づきの宮尾早雄氏よりお話をうかがった。調査は、調査にあたったスタッフの質問にお答えいただく形式をとり、のちに本部の中を見学させていただいた。今回の調査にあたっては、妙道会自体を紹介する資料が少ないので事前に予備調査ができなかったことと、急遽調査の対象としたために準備不足の感じであった。しかし一応の取材と調査目的は達成されたと思われる。このレポートを作成するに当って使用した資料は、『新宗教辞典』（東京堂発行）、「毎日グラフ」（一九八一年十一月号）、「現代と宗教」（一九八三年六月号）、「妙道」（四二九号）である。

※調査日時　昭和六十二年四月一日
※場　　所　大阪市天王寺区松ヶ鼻町　宗教法人妙道会教団本部
※調査スタッフ　赤堀正明主任、髙橋謙祐所員、山口裕光・植田観樹・片野博義各研究員

一、沿　革

1　創立者

佐原忠次郎（明三十三～昭三十三）とその夫人の佐原俊江（明三十七～昭四十四）で、前者は聖師、後者は普師とよばれている。現在は、創立者の夫妻の二男、佐原慶治（昭三～）が会長をつとめている。聖師は資生堂と並ぶ化粧品業界の草分け的存在の商店であった佐原商店の二代目であって、関西では有名な商店の出であった。

2　成立

昭和二十六年二月に、霊友会第十一支部長であった佐原忠次郎が開創する。霊友会からの分派独立は、小谷キミ霊友会会長のおこされた「赤い羽根事件」などの事件処理問題等から、宗教者としてのあるべからざる行為に対する許せない疑問から独立したといわれている。妙道会教団の歩みは、次の通りである。

〔昭和二十六年〕
佐原忠次郎・元霊友会第十一支部長、大阪市南区北桃谷町六三に「妙道会教団」を開創（二月四日）。理事長に就任。俊江夫人とともに経典「在家祖先回向要品」を作成。

〔昭和二十七年〕
佐原理事長、「妙道の十訓」「三大誓願」「家庭実践要訓」など教団の指針を発表。積極的な布教活動始まる。

〔昭和二十八年〕
「妙道会教団」、宗教法人の認承を得る（二月二十八日）。

〔昭和三十一年〕
本部を松ヶ島町に移し開所式（二月五日）。

〔昭和三十三年〕
「日の御本尊」開顕。三ヵ月後佐原理事長遷化、五十八歳（八月二十一日）。

〔昭和三十四年〕

新本部講堂完成（三月八日）。教団本部の機構を改め会長制を敷く。会長に俊江夫人、理事長に前理事長の実弟・佐原徳次郎氏。青年部結成、部長に前理事長の二男・佐原慶治氏。

〔昭和三十五年〕

教団組織を五十支部百三十系統に拡充。布教活動推進決定（五月八日）。故佐原理事長に「聖師」の尊称を贈る。

〔昭和四十年〕

京都、滋賀、奈良、兵庫での布教活動活発。

〔昭和四十一年〕

滋賀県滋賀郡志賀町栗原に「聖地」を決定（六月十日）。

〔昭和四十四年〕

佐原俊江会長遷化、六十四歳（三月二十八日）。教団葬は大阪・阿倍野斎場（四月六日）。教団は二年後の昭和四十六年三月一日、故佐原俊江会長に「普賢菩薩」の働きを意味する「普師」の尊称を贈り、「聖師」と「普師」を併称する場合は「聖師両先生」と呼ぶことを決めた。

〔昭和四十六年〕

空席だった会長に佐原慶治青年部長（聖師両先生の二男）。佐原新会長は理事長も兼任、佐原徳治郎前理事長は名誉理事長に。

〔昭和五十年〕

聖地完成。盛大に「聖地びらき」（九月二十七、二十八日）。

〔昭和五十一年〕

教会制・新導師制発足。

〔昭和五十二年〕

ヤングミセス、壮年男子に教団活動の領域拡大。

3　教勢

この妙道会教団の創始者は、資産家であったためか、何かこせこせしたところがなく、落ちついたおおらかな雰囲気をもつ姿勢を感じさせている。それが教団に反映されているのか、積極的に布教教化という強い姿勢はみられず、信仰を楽しくさせていただき、おおらかに生活するよう指導されているようにみうけられた。そのためか、教団も文書で宣伝布教し、アピールすることはないそうである。

教団の教勢の中心は、関西である。『宗教年鑑』（六十年度版、文化庁編）によれば、会員は約二一九、二四〇人、教師は二、二二六人、教会布教所は三七六ヵ所である。その中、会員の中心は、中年の女性であると聞かされた。現在は、青年部を卒業した壮年を中心とする男子部、中年女性の集いであるミセスの会の育成に力を入れているようである。

機関誌は、「妙道」月刊五万部、「妙道のみちしるべ」等である。

二、教　義

1　教え

Ⓐ妙道会の教義の根本は、三大誓願、①われら誓って妙法華経に帰依し奉る、②われら誓って日夜御先祖を供養し奉る、③われら誓って大法を宣布し思想を善導し奉る、に集約されている。それは、法華経を仏教の真実なる教えとして信じ、自分自身がその精神を現代にどのように活かし、自分自身の根性直しをしてゆくことを大事にし、その信仰的立場から先祖供養の実践を重視する。即ち①心の広さの求め方、②先祖供養の二本立ての教えとなる。

Ⓑ先祖供養については、創立者の語録に、「現代仏教の欠点は、その深淵な教理が、人々の現実の生活に生かされていないことである。したがって教理は教理、生活は生活と遊離して、教理が現実生活の解決に結ばれなくなっている。これは、教理に欠陥があるのではなく、教理の把握に欠陥があるのである。この根本的な欠陥を正し、現代に生ける仏教にするには、在家において家庭全体が、自らの祖先のご供養を実行するよりほかにないと確信する……いかなる仏道修行も、先祖供養の実行を欠いては魂のぬけたものになる」とある。血のつながりから在家である子孫の自分たちが、ご先祖の成仏を願い、ご先祖が積んできた業のお詫びをさせていただき、自分たちの現世の罪をお詫びすることが供養という。先祖によっていかされた存在である自分が、先祖を供養することによって、生きとし生けるものの尊さを知り、一夜の先祖供養を通して、今日一日の生活が良かったと心から喜ぶようにする。今日一日はこの一月、この一月はこの一年、この一年は一生へと展開し、自分を含む家族社会の全部が今日一日よろこびの生活をさせていただくように、法華経の教えを通して現代にいかして実践してゆくことという。

Ⓒこの妙道会の教えの柱として中心をなしているものは、「聖訓」十二項目である。聖訓として創始者が会員に法華経の真髄を現代風にわかりやすくまとめ、これを修行したならば成仏できるとして、「聖訓身読」として修行し、信仰の中心としている。

聖訓身読

① 夫婦両家のご先祖を朝夕回向供養しましょう。

② 国家繁栄、社会発展を祈願しましょう。

③ 戦没者のご冥福を祈りましょう。

④ 天候を念じ、産業の増進を祈願しましょう。

⑤ 男子も女子も邪見をはなれ、お互いに優しい人になりましょう。

⑥ 礼儀正しく言葉づかいを考えましょう。
⑦ 常識は自己をはなれて考えましょう。
⑧ 感情に走ることをつつしみましょう。
⑨ 深く因果を信じ、懺悔新生活をしましょう。
⑩ 大善を目標とし小善より実行しましょう。
⑪ 社会および家族の人のためになることを実行しましょう。
⑫ 今日一日の生活を喜びましょう。

このうち、①は開として、②～④は大乗の祈りとして、⑤～⑧は自行として、⑨～⑪は他行として、⑫は結として分け、具体的にその時に応じて実践されることが求められている。

2 経典

法華三部経を所依の経典としている。それは、開創者が啓示を得て三部経を凝縮して一日の御供養の範囲内に、在家の者が読誦できる範囲内におさめたものである。『在家祖先回向要品』

三、本　尊

本尊は日の御本尊である。十界のすべてを包含するもの、すべて守られている象徴として、赤く日ノ丸の大輪で表現されている。開創者の、これについての説明は残されていないとのことである。

南無妙法蓮華経

四、組織・機構並びにその機能

1 本部　大阪市天王寺区松ヶ鼻町四―三四

2 聖地　滋賀県滋賀郡志賀町栗原

3 修行地　七面山登山修行

a 機構　宗教法人代表役員・理事長は、任期二年、責任役員・常務理事（五名）も任期二年

b 組織

- 本部――直轄道場（奈良・東京）
- 教会――（支部）

青年部・ミセスの会・男子会がある。青年部は部長をもうけ、ブロック化をして組織化している。ミセス・男子会は、組織化はまだしていなく、自主的な集まりとなっているという話である。

また教団は、ブロック化して地域割をしているが、長などは設置していない。大阪では、七ブロック化しているが、単に区分しているということで、組織化はしていない。また、救いのみちびきが親子関係なので、地域的に組織化することができにくいとのことである。

組織のトップに会長がいるわけであるが、世襲化されている。この世襲化について教団は、世襲制でなかったら信者会員がついてこないと考えている様子。そのことの説明は、次のようにいわれている。「根本の教えを受けて、血脈相承によって相伝してゆく。教えに帰依してゆくのであれば、血脈相承が一番よい。開創者の教えは、血脈でつながった人こそ教えを今に生かし具現できると考え、霊界の先師より教えを受け、今世に具現化されてゆく人としてみるのである。そこにこそ神格化があり、また神格せねば、教えの重みが出てこない」と考えている。

五、未信徒の教化と信徒の教育法

ⓐ未信徒へのアプローチは、教団自体が親から子へ、子から孫へという信者の形をとっていることから、自己自身の周りから先祖供養と自己変革を中心に布教している。即ち〝おみちびき〟ということで、自分自身の身近な人（親戚・子供のＰＴＡ・近所の人等）から先祖供養、自分の性根を変える信仰としてすすめてゆく。各地の教会へ月一回の御法座、又は本部法座へ出させたりしてゆく。この〝おみちびき〟の親子関係は、むすびつきが強く、入信者は入信をすすめる人を信頼して、その人の姿をみて入信したので、信仰者の信行姿のあり様が教化のカナメとなっている。しかし最近では、一人一人では信仰的心情は有しているのだが、組織に入ってしばられるのを嫌う気風があって、入信し教団に所属させにくいむずかしさがあるという。そして、その〝おみちびき〟させていただいた会員には、その後いくたびかたずねて、血のかよったお世話、即ち〝おはからい〟をして関係が断たれぬよう、輪を強めてゆくことがなされている。会員同志の〝おはからい〟と、会員による布教〝おみちびき〟を通して、様々な暮しの生活の中で菩薩道を精進するという教えである。そこには、日常の生活の場を修行の場として、在家の姿のふるまいを打ち出してゆくのである。

ⓑ法座は、お互いに体験を話しあい、悩みをうちあけて、それに対してアドバイスをいただくことで、法座とは救い救われの場と定義されている。その場にのぞんだら、自分から発露させ気づかせていただくようにする。本部での法座では、人数の関係上、体験発表と、幹部・会長等の指導者のお言葉をいただく形式をとっているそうである。

ⓒ現世利益を求める人に対して教団は、現世利益は信仰の副産物と考え、信仰のおかげでいただくもので、自分自身の修行いかんと教えている。即ち現世利益を求めるその眼を覚まさせることに主眼をおいているという。教化にあたっては、現世利益の願い祈りは多いけれど、信仰してすぐに救われることはないが、信行は良いことだからすぐ

やりなさいと説き、悩みをどうみてゆくかという見る目を変えさせていくことが大事という。教団としては、現世利益を求めるその気持を変えさせ、ご利益といわれるものは、法華経の経力によっていただけるという信をもたせるようにしているという。教団としては、病気直し等のことはしてないそうである。

ⓓまた、所依の経典は法華三部経といわれるが、妙道会としては法華経の講義は全くしていない。勤行として読む程度である。それは、解釈したからといって救いがあるわけでなく、救いはまず実践であるという考えによる。

ⓔ会員には、信仰を切磋琢磨するために、七種の段階、施導師・弘導師・修導師・行導師・智導師・慧導師・浄導師がもうけられている。それは、会員の修行と会員の入信者数によって導師号がさずけられるという。

ⓕ新興教団といわれる教団には、若者が多いといわれているが、妙道会教団自体は新人類に対しては、はかり知れていない様子。教団には青年部があり、第三日曜日にあつまり、体験発表して活動しているが、青年会員の中を見ると、家庭で信仰している家の二世が青年部に来ているのが現状で、青年が一人で入会してくる例は少ない。活動する人は千人程であって、教団としては、教団に入信させるまでの力はないとして、今後の課題と考えているという。

ⓖ霊的なことについては、その必要性はないと教団では押えている。教団としては、霊的なことをして人が救われるかどうかは問題であって、要は心のチャンネルをどう切りかえてゆくかが大切と考えているとのことである。霊能力をもった人は、初代会長の直弟子若干と会長夫人にはあったといわれている。

六、宗教体験と意義づけ

先祖供養は報恩の実践としてとらえられ、その実践がまことの人間の道として考えられ、その修行の場は、家庭での供養、錬成会、法座と、七面山登山が中心に用意されている。

青年部では、四月に七面山への登山修行と、七月の聖地での二泊三日の修行と、毎月の定例法座が中心となり、一

般では、個人個人の修行と八月の七面山修行が中心となっている。青年部の七月の聖地での修行では、若者に企画させ、やや遊び的要素を入れつつ修行させているとのことである。

七面山修行は、霊友会の流れを取り入れていると思われるが、妙道会教団は、その修行は只管唱題ととらえ、大乗の祈りとして社会平和と人類の幸福を祈念するために修行させていただき、題目の力によって先祖の霊の成仏を願うことにあるという。その七面山修行は三つの目的があるといわれている。昔は七面山参拝と言っていたが、現在では修行としてとらえ直しているが、七面山本社へのお参りにて加護を受ける。そして登山へのプロセスにその身心を錬ってゆくことを六波羅蜜の行として大事にする。即ち六波羅蜜とは、①助けあう登下山の中に自分を他にささげる布施の行、②必要な規律を守ること（禁酒禁煙）、自らに課する持戒の行、③登山の苦しみに耐える忍辱の行、④自分を励ます精進の行、⑤唱題一すじで雑念をすてる禅定の行、⑥大乗の祈願と共にひらく智慧の行として意義づけている。

更に、日常の暮しの中に法華経の菩薩行を求める在家の人達にとって、年に一度日常の雑事をはなれて唱題一すじに没頭し、大法宣布を決定させる修行と考え、七面山登下山中、一万回に及ぶといわれる唱題がひたすら行なわれ、題目と一体化を目ざし、自分を解放し、日常の修行ではなしえない行とみるのである。

その七面山修行の目的地七面山に対しては、教団は次のようにとらえている。七面山の修行は、登山のプロセスにおいて自分自身を錬るのが主体であって、同じ行衣を着て同じ食事をして、御守りをいただける場所があるから行くのであって、七面山でなければならぬことはなく、たまたま各人の信仰心をより高めてゆく場としてふさわしい修行の場に適しているからであって、他にあればどこでもよいとみている。即ち七面山登山を通して六波羅蜜の修行をすることが中心で、七面大明神にお参りをすることが目的ではないといわれていた。

七、信徒の守るべき事項

a　信仰実践は、開創者が実践訓として残した十二の聖訓を守ること。

b　昭和四十年に制定された「日々の反省」が要求される。

①　ご先祖供養は毎日かかさず実行していますか、両家のご先祖の法名をいただいて霊鑑に書写しましたか。

②　ご皇室の安泰、国家社会の発展と無数の戦没者のご冥福を祈っていますか。

③　大自然の恩恵に感謝し、五穀のみのりを念願していますか。

④　自分のもつ邪見（まちがった考え方）に気づいていますか。

⑤　今日一日、悪舌（わるいことば）は、つかわなかったですか。

今日一日、自己本位のものの考え方はしなかったですか。

今日一日、自分の感情にとらわれた行動をしなかったですか。

⑥　因ある故に果が生ず。過去の祖先があって現在がある。今日一日の行動は、将来の因となることを忘れていないですか。

⑦　今日一日に自分は、どれだけ進歩精進したでしょうか。

⑧　今日一日小さいことでも善いことの一つでも行ないましたか。小さい善いことも毎日の積み重ねで大きいよいことになる。

⑨　今日一日家族のため社会のため役立つことをしましたか。

⑩　家族一同が今日無事に生活できることの喜びをしみじみ感じるようになりましたか。

c　勤行の方法は、別にとりたてて違うことはないが、お灯明一対、お線香七本（お題目の七字から来ているとのこ

と)、おたすきをつけて読誦することが求められている。

d　勤行にあたっては、総戒名をいただかなければならない。妙道会では、夫婦両家の先祖供養なので、総戒名は信仰の的となり、先祖の集合で象徴的にあらわすものであるという。集められる先祖は過去帖にのせ、それ以前は総戒名にのせることになると説明している。

八、財　政

月に一世帯一〇〇円の会費を納める。又、これとは別に志があれば志納金を納める形をとっている。

九、教団に入って良かった点・悪かった点

調査できず。

一〇、既成仏教との相違点、魅力

既成仏教をどうみているかというと、座して行う姿勢にみえ、外に出て布教する姿勢がないように、教団からは見えるという。檀家が悩みで寺へ行って僧侶に聞いて相談する気がなく、解決の場としての寺への認識は薄いのではないかと思われ、救いの機能がなくなっているように思えるという。

また日蓮聖人に対しては、他の法華系教団と同じように、法華経を実践された一人としての位置づけでしかない。妙道会にては、日蓮聖人の教えをそのままいただくことはなく、教化の上で御遺文を使うことはあるという。即ち、救いの機軸に日蓮聖人を求めてはいないということである。

一一、結びにかえて

調査を終えて、このレポートを提出するに当り、報告者の意見は控えたが、次のような感想をもった。急遽調査教団としたために、準備不足のため、①お題目総弘通とからめて考えると、信徒・未信徒の教化方法の実際をきくことに重点をおくべきだった。②その教化方法の批判と問題点をうかび上がらせるように調査すべきだった。③信徒のやる気をおこす方法は何なのか。④未信徒から信徒になった宗教的体験の過程と、組織に入ってからの弘める人としての活動のあり様はどうなのか、などを聞き出せなかった。